



チェルノブイリ救援・中部 理事一同からの緊急寄付のお礼

ポレーシェ 168 号で、「理事一同からの寄付の緊急依頼」をいたしましたところ、たくさんの皆さまから寄付をお寄せいただきました。本当にありがとうございます。

皆さまに喫緊の窮地を救っていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。お礼状を先に送らせていただいた方もいらっしゃると思いますが、改めて、理事一同からの「緊急寄付金のお礼」(2018 年 12 月 26 日付け)を掲載させていただきます。

お寄せいただきました寄付金は大切にに使わせていただきます。これからも当団体を支えていただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。(理事一同)

緊急寄付金のお礼

拝啓

師走の候、皆様におかれましてはますますご清栄のこととおよろこび申し上げます。

さてこの度は、緊急寄付の御願いにお応えいただきありがとうございます。年末ぎりぎりのお願ひにもかかわらず、たくさんの寄付をお寄せくださり、あらためて心よりお礼を申し上げます。

12 月 22 日現在までにお寄せいただいた寄付金は、215 万円を超え、その内訳は次のとおりです。

◇ミルク支援	12 万 5 千円
◇被災者支援	17 万 1 千円
◇チェルノブイリ支援	6 千円
◇福島支援	12 万 8 千円
◇一般寄付	172 万 4 千円

一般寄付金に限りましては現時点で 172 万円をお寄せいただきましたので、今年度の運営資金が確保でき、無事に今年度も終わられる見通しが立ちました。多くの皆さまに当団体が支えられていることを改めて感じ、とてもありがたく、感謝の気持ちでいっぱいです。お寄せいただきました寄付金は大切にに使わせていただきたいと思います。

尚、今年 10 月に南相馬市で測定した「南相馬市・浪江町・富岡町放射線量率(空間線量率)マップ」と「南相馬市・浪江町・富岡町土壌放射線量マップ」を同封いたしました。土壌マップは、初めてご覧になる事と思います。「空間線量率と土壌汚染について解説」を付してお読みください。

今年も残すところあとわずかとなりました。皆さまが良き新年を迎えられるようお祈りいたします。 敬具

チェルノブイリ救援・中部
理事 一同

2018 年 12 月 26 日

〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST ブラザ鶴舞 5 階 B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱 UFJ 銀行 高畑支店(店番号 297)

口座 番号：普通 1682863

口座 振替：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便 替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

★淡路島(洲本市)にて、技術研修 開催！

昨年(11月23日～25日)、「全国 菜の花 PJ ネットワーク」の中心的活動団体の一つである「あわじ菜の花エコプロジェクト」から岡田清隆氏を招聘し、南相馬で技術研修を行った。今回(1月24日～26日)の研修は、その続編「南相馬→淡路(洲本市)」の現地視察である。南相馬(再生協&アグリあぶくま)からは、杉内代表をはじめとする主力メンバー(6名)、チェル救からは原理事長、そして「菜の花 PJ ネットワーク」代表の藤井さんにもご参加いただき、充実した研修会が行われた。「百聞は一見に如かず」、参加者は皆、それぞれの立場で真剣に質問していた。

「行政を巻き込み、しっかりとした活動実績が積み重ねられている」「ナタネ栽培や搾油全般のノウハウが、しっかりとマニュアル化(見える化)されている」、そして「私たちの目指す『油菜のさと』のモデルがそこに実在している」...ことなどを自分達で確かめることができ、実りの多い研修となった。

私たちの南相馬には、「放射能」という逆風が吹き荒れてはいるものの、研修に参加したメンバーは皆、希望の光を見い出すことができたのではないと思う。研修をエスコートしていただいた「あわじの岡田さん」、そして研修会の実現に尽力していただいた「国際ロータリー財団」「福島大学」に、改めて感謝申し上げます。



★F's Kitchen」の「6 次化ラボ」に参加！

「F's kitchen」の「F」は、フクシマ／ファーマー(農家)／フィッシャーマン(漁師)の頭文字「F」。福島県出身の「萩 春朋シェフ」が経営するフランス料理店であり、地元「フクシマ」の生業(なりわい)の復興・再生を目指して、県外から訪れるお客様に、地

元の野菜や魚介類を食材とした創作料理を提供している。また、その食材を使った「6 次化商品」を、農漁業に従事する人々と一緒になって開発するため、レストランに「6 次化ラボ」が併設されている。今回(1～2月)の研修は、「油菜ちゃん」や地元の食材とのコラボに挑戦する企画である。

【萩シェフ談】...「油菜」の知名度は、確実に UP している。「油菜」というブランドを売り込む戦略(地元のシェフとのコラボ)や、「油菜ドレ(コンビニなどで小売りしているサラダ用の小袋)の商品化」など、「攻めの拡販」を展開する時期に来ている。また、新商品「プレミアム油菜ちゃん」を見てビックリした。特に、ラベルのデザインは秀逸。自信を持って拡販すべし。開発・拡販に対する協力は、惜しまない。...etc.

1月9日に行われた「6 次化ラボ」参加団体(+萩シェフ)による交流会では、萩シェフが、各団体から事前にヒアリングした情報をもとに、試作品を作成して披露(例:伊賀いちご園のいちごシャーベット;ガーデンハックルベリーのジャム;油菜ちゃんを使った魚や肉の缶詰;うなぎまぶしご飯のおにぎり...etc.)、皆で美味しくいただきながら盛り上がった。また、相馬松川温泉のホテル「飛天」の社長も参加され、「福島の 6 次化商品を、是非とも同ホテルで販売したい」...といったエールをいただいた。生販の入口・出口が繋がる良い企画となり、今後の展開が楽しみである(2月には、萩シェフの「6 次化ラボ」で試作会が予定されている)。

★ LUSH ジャパンの御一行様 来訪！

1月19日(土)～20日(日)、「再生協&とどけ鳥」に対する強力な支援企業である「LUSH ジャパン」から、チャリティバンクの事務局やメディアチームの皆様(総勢4名)が南相馬のご視察にいらっしゃった。ナタネ圃場・信田沢搾油所・「油菜のさと」候補地・とどけ鳥事務所・除染土の仮々置場・被災地(浪江町)...などをご案内し、「チェル救 ⇄ LUSH」の絆がより強くなることを願って、私たちの活動の PR を行った(お返事メールは P7 下を参照)。

社会福祉法人 中日新聞社会事業団の「東日本復興支援事業」 決定しました !!

「ウクライナの消防士を日本に招きたい！」という声が南相馬で上がり、昨夏、社会事業団の支援事業募集に応募しました。

12月中旬、書類審査(一次審査)を通過し、12月19日に救援・中部の事務所に事業団の皆さまが来られ、団体の面談審査(二次審査)が行われました。

救援・中部設立のきっかけ、その後の支援活動、そして、東日本大震災後の関わり・・・お話しすることはたくさんありました。

そして見事！ 配分委員会(最終審査)から、東日本復興支援事業交付決定通知書(選考結果)が通知され、3月7日に行われる贈呈式への案内が届きました。

ポレージェ読者の皆さんに、「緊急寄付金のお願い」という依頼をしなければならないほどの緊迫した財源でしたが、南相馬の願いをどうしても実現したかったので、社会事業団の交付決定は最近にない感激でした。たいへんありがとうございます。

中部地方からですと、ちょっとした「旅」になりますが、救援・中部が行っている南相馬の支援活動を視察するためにも、どうぞご参加ください。(下記の案内をご参照ください。)(美)

南相馬市(小高区)に「ウクライナの消防士(2名)」をお招きします！

昨年2月、「チェルノブイリ 31年 フクシマ 6年 ～原発事故被災者は心をつなぐ～」として、ウクライナからボウクンさんとドンチェヴァさんをお招きし、講演会を開催しました。

やむなく我が家を離れ、新たな地で避難生活をして来た私達の想いはそれぞれです。チェルノブイリ事故後、新たな土地で暮らしてきた方が、未来に進むために体験してきたことは、私達の指針となるはずです。

5月25日には、事故当時に消火活動に携わった消防士のインタビュー映像(字幕付き)を観ていただき、現在も被曝地域で消火活動に携わる現役の消防士から、現在の被曝地域のようにすを伺い、30年後のフクシマが迎える未来を考える機会にしたいと思います。



小高生涯学習センター「浮舟文化会館」

チェルノブイリ赤い森・フクシマ群青の海

—チェルノブイリから学ぶ福島30年後の未来—

日時：2019年5月25日(土) 12:30 開場 13:00 開演

場所：南相馬市 小高生涯学習センター「浮舟文化会館」

(〒979-2124 南相馬市小高区本町二丁目89-1)

電話 0244-44-3049

クリスマスカードキャンペーン 2018

《各地からカードが集結！ そして、キャンペーン終了》

(インターン生 高田 浩気)

皆さま、こんにちは。昨年秋から始まった X'mas カードキャンペーンについて、報告します。

まず初めに、X'mas カードキャンペーンにご協力してくださった皆様に、感謝申し上げます。皆様が作ってくださったカードや折り紙は、無事に福島とウクライナに届けることができました。

今年度は 119 もの、日本とウクライナの個人及び団体の皆様のご協力により、3,000 通を超えるカードが集まりました。そして、ウクライナへ 1,832 通、福島へ 1,125 通、東海圏に避難されてこられた方々へ 208 通、合計 3,165 通を送り届けることができました。



＜事務所に届いた手作りのカードと折り紙・メッセージカードを同封します。

(左：上田さん、右：橋本さん)＞

当初、2,000 通を超えるカードが集まってくるということを聞き、その量をうまく想像ができなかったものの、とても驚いたのを覚えています。実際に、3,000 通を超えるカードを目の当たりにして、その量に驚愕し、思わず息をのんでしまいました。

11 月 19 日にウクライナ便のカードを、11 月 30 日に福島用のカードを締め切り、事務所では梱包・発送準備を行いました。皆様が作ってくださったカードと、サンタ・折り鶴などを封筒に入れる作業をしていたのですが、このカードが実際に子ども達の手に渡り、子ども達が喜ぶ姿を想像するだけで、とても心躍る嬉しい気持ちになりました。

《とどけ！ X'mas カードとその想い》



＜今年のサンタリオは、左からチェル救：神野さん、インターン生：高田さん、とどけ鳥ボランティア：高橋さん＞

12 月 11 日から 14 日の 4 日間、『とどけ鳥』を拠点に、福島県南相馬市内の 8 つの保育園・幼稚園と小中学校を 1 校ずつ訪問し、子ども達にクリスマスカードを贈り届けることができました。

子ども達の中には、サンタに驚いて泣いてしまう小さい子もいましたが、多くの子ども達が笑顔でクリスマスカードを受け取り、嬉しそうな表情を浮かべていました。また、福島へ届けたクリスマスカードのほとんどが、遠く離れたウクライナから届いたもので、そのことを子ども達に伝えると驚いた表情をしていました。「本当に心がこもった贈り

物は、世代や文化・言葉の壁を超えて、伝わるものなのだ」と改めて感じました。この X'mas カードキャンペーンは、原発事故が起きた被災地に住む方々の心の支援を目的とした活動であると同時に、日本とウクライナの懸け橋にもなる活動なのだと感じることができました。

《この活動を通して感じたこと》

この X'mas カードキャンペーンは、1991 年から開始し、28 年が経過しました。このような活動に参加させてもらえることに、とても光栄だと思うとともに、活動に対する責任感を感じていました。今まで、ボランティアとして様々な活動に参加してきましたが、インターンとして責任ある企画に携わるのは初めてで、最後まで無事にやりきることができるかという不安でいっぱいでした。

実際、このキャンペーンを進めていく中で、企画運営の難しさや賛同者を集めることの難しさも感じました。しかしながら、事務所の和やかな雰囲気やカードや手作り作品に込められた人を想う温かい気持ちに触れ、私自身の気持ちも昂り、この X'mas カードキャンペーンを通して、「1 人でも多く人の心を動かしたい！」「このキャンペーンを無事に成功させたい！」と思うようになりました。また今回は、実際に原発事故の被災地である福島県南相馬市に伺うことができました。震災・災害から 8 年が経過しようとしている現在でも、ある地域では未だ時間が止まったままで唖然としました。しかしながら、現地で生活している人達は、震災・災害にも負けずに、笑顔で楽しく過ごしており、その姿に将来への“希望の光”を垣間見ることができました。この“希望の光”を決して消してはならないと感じました。

最後に今一度、X'mas カードキャンペーンにご協力してくださった皆様、当団体のスタッフの皆様心に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



笑顔があふれるサンタさんの訪問



原子力発電環境整備機構(NUMO)による

高レベル放射性廃棄物地層処分 意見交換会 松本

(南箕輪村 原 富男)

1月19日、松本市で開かれた、原子力発電環境整備機構(NUMO)主催による、「高レベル放射性廃棄物の地層処分について」の意見交換会に参加した。NUMOは、電力各社からの資金拠出により、放射性廃棄物の処分を目的にする組織。参加者は30名ほど。私は名古屋と長野市での意見交換会にも参加してきた。両会場では、参加者が質問や意見を述べたあと、6名くらいでテーブル席で話し合うという流れであった。

意見交換会なのに意見を言えない！ 質問できない・・・

ところが今回は、NUMOによる説明の後、突然「質問、意見は受け付けません！」と言う。参加者は、なぜ説明会なのに質問・意見を言う事ができないの・・・とNUMOに抗議し、会場は騒然となった。結局、私たちの意見は受け入れられず、テーブル席での話し合いになってしまった。なぜこんなことになったのだろう。

それは2年前にさかのぼる。地層処分の説明会の参加者が少なく、地層処分賛成の意見が出ないため、NUMOは大学生に金を与えて説明会に参加させ、電力会社からも参加者を動員させたことが問題になり、NUMOは以後、暫く開催を中止したという経緯がある。NUMOは、フェアでないと批判されたにもかかわらず、反対意見自体が問題だと考え、「質問意見を封じ込める」ことに決めたのだ。

原発を稼働し続ければ、高レベル廃棄物の総量は増え続ける

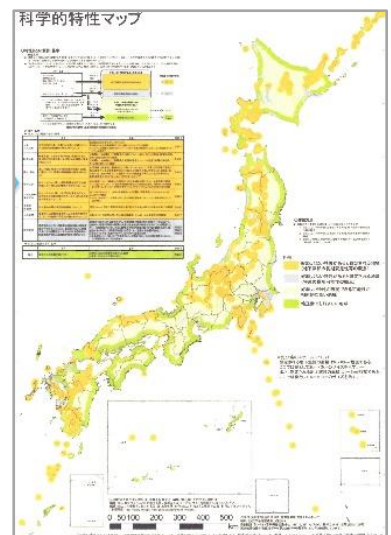
NUMOは、「次世代に負担を先送りしない」ために、地層処分が必要と考えている。しかし、地層処分の前提は原発を稼働させ続けることで、廃棄物総量は増え続ける。きれいごとではもうたくさんだ。総量を規制すべきなのに、「負担の先送り」をしているのはNUMO自身だ。処分のメドが立たない原発を稼働できるのか。常識外れこそNUMOの本質である。

日本学術会議の提言→NUMOは廃棄物処分の枠組みを白紙に戻す覚悟で見直せ！

2010年、総理府原子力委員会は、高レベル放射性廃棄物の処分について日本学術会議に意見を求めた。日本学術会議は、福島原発事故後の2012年に回答書を発表した(以下、要旨)。それによれば、

- ① 処分政策が各地で反対に遭い行き詰まっているのは、説明の仕方というレベルでなく根源的次元に由来する。政策枠組みを**白紙に戻す覚悟で見直す**べき。原発の将来展望、廃止か継続か、継続の場合はその規模。
- ② 行き詰まりの理由は、超長期にわたる**安全性と危険性についての科学的知見の限界**。
- ③ **国民的合意が欠如したまま、最終処分地選定を先行させたこと**。
- ④ **廃棄物処分方式受益圏と受苦圏が分離、これへの対処として電源三法交付金などの金銭便宜提供は適切ではない**。
- ⑤ **公正な立場にある第三者が、討論過程をコーディネートする**。
- ⑥ 処分問題は、千年・万年の時間軸で考えなければならない。**限られた利害関係者との間で合意を得て、経済的支援を組み合わせる手法は紛糾を生む**。

意見書はもう7年前に出された。NUMOはこの意見書を正面から受け止めただろうか。都合のいいところだけ拝借し、**科学的知見の限界**といわれれば、「科学的特性マップ(右図)」でその場を取り繕い、公正な討論の場さえも奪っている。既に世界の流れは脱原発にある。官邸主導の原発輸出は、英国・ベトナム・リトアニア・米国・台湾・トルコなど、すべて頓挫している。また昨年、九州電力では電力が余り、自然エネルギー電力の「出力抑制」を6回行うに至った。



カトリック「3.11 祈りの集い」での講演会のお知らせ

(上田)

2018 年 3 月 11 日 (月)、カトリック名古屋教区主催で、3.11 の祈りの集いが開催されます。タイトルは『東日本大震災・福島原発事故 犠牲者追悼・復興祈願の日 宗派を超えてつなぐ祈りの手』というものです。

今年で 7 回目ですが、「祈るばかりではなく、今回は復興に向けて前向きに努力している方々のお話を聞きたい」という声上がり、私たちチェルノブイリ救援・中部の神野英樹理事が推薦されました。皆様ご存知の通り、神野さんは毎週欠かさず名古屋から南相馬に通い、週に 4 日以上、「放射能測定センター・南相馬 (通称: とどけ鳥)」にて、土壌や食品・水などの放射能測定機器を管理したり、「南相馬農地再生協議会」で、油菜ちゃんの生産・販売を管理したりしています。講演では、南相馬とチェルノブイリ救援・中部とのかかわりや油菜ちゃんのことなど、興味深いお話が聞けるものと思っています。

なお、講演は 13 時 35 分から 50 分間です。その後は 14 時 26 分から黙祷をもって祈りに入ります。祈りも宗派を超えて、仏教・プロテスタント・イスラム教などの方々も駆けつけてくださり、一般の市民の皆さんとともに祈りたいと思っています。どなたでも、関心のある方はぜひ足をお運びください。当日は、油菜ちゃんなども販売する予定ですので、お買い上げくだされば幸いに存じます。

日 時 2018 年 3 月 11 日 (月) 13 時 30 分～

場 所 カトリック布池教会 大聖堂 (無料駐車場はありません)

LUSH ジャパンご一行様 ご来訪ありがとうございました！

1 月 19～20 日、4 名の皆さまの南相馬視察がありました。以下に翌日届いたメールから、訪問の感想を紹介します。

『週末は私たちの為に、朝早くから 1 日お時間をいただき、本当にありがとうございました。』

今回はじめて南相馬にお邪魔したのもおりましたため、震災当時のこと、被害のあった場所、現在の皆さまの活動、未来を感じさせていただける場所など、様々な場所へ訪問させていただき、お話しを伺え充実した時間を過ごさせていただくことができました。

私自身も、震災から時間が止まっている場所、人が戻りはじめ表情が変わり始めた場所、人の生活が感じられる場所を、ただ自分たちの車で通るだけではわからないお話しを伺わせていただけたことで、改めて震災・原発事故の大きな爪痕を感じることができました。そして、その中でも未来に向かって歩みを進める農地再生協議会の皆さまの活動の素晴らしさを、感じることもできました。まだまだ夢広がる油菜ちゃんの今後が、とっても楽しみです。

また一方で、放射線の影響をはじめとする原発事故についての風化は、県外だけでなく福島県内で暮らす皆さまの中にもあるのだということ、今回強く感じました。だからこそ、とどけ鳥・チェル救の取組まれる、測定を続けること・そこで得られた情報が地域の皆さんに共有されることの重要さも感じました。弊社助成金で応援させていただいた事業が、どのように地域の皆さまに受け取られているのか、南相馬で伺えたこと、またわかるようでわからなかった、「農地再生協議会」「とどけ鳥」「チェルノブイリ救援・中部」の 3 者の関係がクリアになったのも、個人としてはありがたかったです。

今後とも、様々な形で皆さまとのご縁は続くことかと思いますが、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。(T)』



福島を忘れない！ 被ばくから 8 年 ——チェルノブイリ原発事故から 34 年——

名古屋市名東区の「ピースあいち」は、第二次世界大戦で空爆を受け、大きな被害を被った当時の名古屋を忘れまいと 2007 年 5 月に設立された完全な民設民営の戦争・平和記念館で、運営には多くのボランティアさんがあたっている。常設展「愛知県下の空襲」「15 年戦争の全体像」などの他に、「戦争の中の子どもたち」などの企画展を毎月行っており、全国から見学者がくる貴重な戦争・平和記念館である。毎年 3 月には戦争や空爆の写真や資料を集めた特別展と講演会などを開催している。

2011 年の福島原発事故後は、チェルノブイリ救援・中部も協力し、毎年「福島を忘れない」写真展示などを行ってきた。

今年は 3 月 5 日から 5 月 5 日までの 3 か月間にわたり、チェルノブイリ原発事故の実情と原発事故の被害を受けた福島の被災地を撮り続けてきた写真家の飛田普秀さんの写真を展示する。今年はチェルノブイリ事故から 34 年目、展示を通じて 30 年後の福島を考える。

3 月 9 日（土）午後には、チェルノブイリ救援・中部の戸村京子さんと河田昌東が講演を行い、参加者と話し合う企画がある。是非多くの皆様方の参加を……。 （河田）



＜名古屋市名東区に建つ「ピースあいち」の外観＞

【2018 年 2 月の菊池和子写真展】



＜福島原発事故
フクシマ
「この大地 奪われし人々」(2018 年 2 月)＞

所在地	〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台 2 丁目 820 TEL 052-602-4222
アクセス	地下鉄東山線「一社」 ①出口から北へ徒歩 12 分
開館日・時間	火曜～土曜 11:00～16:00
入館料	大人 300 円、小中高生 100 円

既に幾度も書いたことだが、原子力エネルギーの時代は終わった。そのきっかけは、1986年のチェルノブイリ原発事故と2011年の福島原発事故である。第二次大戦後の冷戦構造の中から生まれた原子力の夢「アトムズ・フォア・ピース」は、広島・長崎と同様にチェルノブイリと福島に大きな犠牲をもたらし、世界の人々はやっと目を覚ました。にも拘らず、この国の政府は「アンダーコントロール」の欺瞞のもとに相変わらず原発を推進し、「ベースロード電源」を目指して原発の再稼働を止めない。この構造を一日も早く変えなければならない。

破綻した原発輸出政策

新年早々、経団連の中西会長（日立）は「国民が反対するもの（原発）を業者が無理に作るのは民主国家ではない、真剣に一般公開の討論をすべき」と発言し波紋を広げた。その一か月前、日立は英国で建設を進めていた原発2基の建設継続を断念し、撤退を表明していた。福島原発事故で安全対策費が膨らみ、資金を英国政府に求めたが拒否され、3000億円の赤字を抱えて撤退を余儀なくされたのだ。1979年のスリーマイル島原発事故以降、新規建設を止めていたアメリカで2006年に新規原発を作る、という話に飛びついて、アメリカ最大の原子力産業ウエスティングハウス社を買収した東芝は、これも福島原発事故後の安全対策費高騰で建設継続をあきらめ、1年前の2018年1月に原発から完全撤退した。その際、2006年に54億ドル（6200億円）で買収したWH社を、たった1ドル（113円）で売却したのだった。国内最大の原子力産業三菱重工も、昨年12月、トルコに建設中の原発から撤退した。これも福島原発事故後の建設費高騰が原因である。この他に、リトアニア（日立：2016年）・ベトナム（三菱：16年）・アラブ首長国連合（日立：09年）など、安倍政権が成長戦略の一つとして進めてきた海外への原発輸出政策は、ことごとく失敗に終わった。世界はチェルノブイリと福島の痛みを受け止め、原発が未来のエネルギーたりえない事を悟ったのだ。しかし、この国の財界人や政治家たちは、今でも原発を「ベースロード電源」と固執し、中西経団連会長は、輸出は止めたもの

の国内原発の再稼働には大きな意欲を示している。世耕経産相などは「今後も新規建設を目指す」と新年早々発言した。愚かといえようがない。

政財界にとって必要だった被曝隠し

1月21日、東京新聞は「福島の11歳の少女が100mSv被曝」と報じて、読者に衝撃を与えた。福島の小児甲状腺がん患者は現在277名に増えたが、県や国は今も「被曝が原因ではない」と主張している。理由は被曝線量が小さいから、という。しかし、国の甲状腺被曝検査のいい加減さは、本誌連載117号でも述べたように、1080名の中でたった一人だけ最大35mSvというもの。それも大きな誤差を伴う検査で、到底信頼できないものだった（詳細はホームページをご覧ください）。今回明らかになった11歳の少女は、原発の地元双葉町で被曝したという。この程度の被曝は当然である。驚いたことに、国の実施した1080名の甲状腺被曝検査は、全て原発から30Km圏外の緊急時避難準備区域外の児童ばかりで、当然、この少女は含まれていなかった。国は始めから被曝隠しを意図的に行っていたのだ。その背後には原発推進という強大な力が働いていた、と考えざるを得ない。甲状腺がんは現在も増加しつつある。何時の日か事実は明らかになるだろう。

被害を少なく見せかけ責任を負わない、というこの国の政権の体質は、第2次大戦の戦争責任に絡む「徴用工」事案や「従軍慰安婦」問題とも無関係ではない。

（河田 2019年1月24日）

第16期測定 ラッシュジャパン・チャリティーバンク助成 完了報告 (池田 光司)

昨年末、緊急カンパに多くの寄付をお寄せいただきありがとうございました。チェル救では、福島原発事故以来、毎年春と秋に南相馬市・浪江町・富岡町の放射能汚染の実態を調査して汚染マップを作成し、地元を中心とした関係各所に配布していますが、この活動も皆さまからいただいた寄付金や助成金によって支えられています。この活動には、1回あたり100～150万円の費用がかかっています。今回、皆さまに緊急カンパをお願いしましたが、昨年は危機的な財政状況にあり、この活動を断念せざるを得ない状況にありました。そのような中、ラッシュジャパンのチャリティーバンク助成を受けられることになり、昨年春(第15期)と秋(第16期)の測定が可能となりました。この紙面をお借りして、ラッシュジャパンにあらためてお礼を申し上げるとともに、ご支援いただいている皆さまに、この活動への理解を深めていただくため、以下に今回助成の完了報告書の主要部分を紹介させていただきますので、ぜひご一読ください。

++++++<以下、完了報告書(助成活動の実施内容の概略部分)引用>++++++

1) 原発事故によって放射能汚染の被害を受けた、福島県南相馬市・浪江町・富岡町の住民に、信頼できる放射能汚染状況を伝えるために空間の放射線量率を測定し、一目で対象地域の空間の汚染状況が分るマップを作成した。このマップを、地元自治体などに配布し、多くの住民が目にするところに貼り出してもらうとともに、希望する住民に配布した。また、住民の放射能汚染状況の理解を助けるために、測定データの分析結果も合わせて報告した。この活動は、福島原発事故直後から半年に1度行っており、今回で16回目となる。半年に1度行うことで、空間の放射能汚染レベルがどのように下がってきているかが分かり、住民が放射能汚染の実態をより正しく理解するための助けとなっている。今回の測定では、“地域ごとにバラツキはあるものの、全体ではここ1年物理的半減期に沿って空間放射線量率が下がった”ことが分かった。

2) 空間放射線量率測定と同時に、各地域の土壌を計250カ所採取し、その放射線量を測定した。今までも土壌の放射線量測定は行っていたが、土壌採取方法が一定していなかったため、今回から、土壌を一定の方法で採取できるように、土壌採取用備品を購入し、採取方法の手順書を作成し、その内容を測定参加者にレクチャーした。

土壌採取方法を統一した結果、域毎の土壌汚染の実態が明らかになってきた。今回の土壌放射線量の測定から、「地域内でバラツキはあるものの、地域で平均すると、空間の放射線量率が高い地域ほど土壌放射線量が高い」「空間線量率が自然放射線レベルまで下がってきている海岸地域でも、土壌中には高濃度の放射能汚染が残っている」ことなどが分かった。

++++++<引用ここまで>++++++

今回(第16期)の大きな成果の一つは、土壌汚染状況の傾向がつかめたことです。土壌中(深さ10cm)の放射性セシウムの濃度は、95%以上が100Bq/kgを越え、平均が3,300Bq/kg、最大では35万Bq/kgでした。核実験やチェルノブイリ原発事故による影響でも、数十Bq/kgであることを考えると、まだ土壌中には高濃度の汚染が残っていることが分かります。今後は、土壌汚染状況の調査も、空間線量率と合わせて行っていく必要があります。この半年に1回の調査は、少なくとも10年間は続ける必要があると考えています。今後とも、皆さまの支援をよろしくお願いいたします。なお、土壌線量測定結果のマップと詳細な報告書は、空間線量率の結果とともに、チェル救のホームページに掲載する予定です。ぜひご覧ください。

(<http://www.chernobyl-chubu-jp.org/sokutei-map.html>)。

国際協力 カレッジ 2018に参加して

去る 12/22 (土) に JICA 中部で、第 13 回目の「国際協力カレッジ 2018」(主催: JICA 中部、事務局: 名古屋 NGO センター) が開催されました。毎年人気のイベントで、定員の 70 名を上回る申し込みがあり、若者からシニアまで参加者の熱気があふれました。午前中はシンポジウム&テーマ別講座で、【1 時間目】4 人のゲストによる“誰ひとり、取り残さない”世界を実現するために～仕事としての国際協力の関わり方～、【2 時間目】「気になるあの先輩に・インタビュータイム!」。

そして午後の【3 時間目】国際協力分野の「ボランティア・インターンマッチング展」で、団体紹介タイムにチェル救・大森さんが活動を紹介、アピールしました。【4 時間目】マッチング展「今日からスタート! 国際協力はじめの一步」では、参加者が 16 ブースを回って、自分に合う団体・活動の話に耳を傾けました。チェル救ブースでは、初参加の大森さんが南相馬での農地再生「菜の花プロジェクト」の菜種油“油菜ちゃん”を手詳しく紹介し、また今年度は終了したばかりのカードキャンペーンについては、来年度での参加を呼びかけました。

【5 時間目】全体会・ふりかえりの時間には、留学中のイギリスからこのカレッジ参加のために帰国したという人の発言に一同驚きの声が上がリ、高校生の真直ぐな意見に拍手が贈られ、関心を同じくする人同士が意気投合したりと、多くの参加者が篤く触れ合うひと時でした。私は名古屋 NGO センターとも関わりを持つ立場として、人と人が出会い、刺激を受けて変わっていき、成長していく姿を毎年目にしています。国際協力に長く携わる人やこれから目指していこうとする人へエールを贈り、SDGs の世界中の「誰ひとり、取り残さない」という精神を大切に努力したい、と心から思いました。(戸村京子)

2018 年 12 月 22 日(土)に開催された、「国際協力カレッジ 2018」に参加してきました。国際協力カレッジとは…JICA 中部が主催

する『国際協力で働くことを知るためのカレッジ (1 日学校)』です (名古屋 NGO センターが事務局を務める協働企画)。この催しの中で、参加者と国際協力をしている団体 (16 団体が出展) が話をできる時間が設定されていて、その時間に、チェル救のことを紹介してきました。この催しへの参加目的は、「チェル救のことを知ってもらふこと」と「チェル救で働きたいと思ってもらえるボランティアやインターン (長期ボランティア) を見つけること」です。

びっくりしたのは、定員 70 名を超える参加者さんがこの催しに足を運んでいたことです。僕よりも若い人がたくさん参加していました。僕と比べたら失礼かもしれませんが、参加されている方々 (大学生前後の年代の方が多かったように思います) の年代のときに僕は、ボランティアの「ボ」の字も考えたことがなかったように思います。

国際協力ボランティアのイメージは、「飢餓・貧困・教育」を考える人が多いようです。チェル救のように、「原子力災害を被った地域や人を支援する活動」は、あまり知られていないように感じました。チェル救のブースに来てくれた人に“クリスマスカードキャンペーン”の活動のことを話したとき、『こうゆう国際協力の方法もあるんですね! 日本に居てもできることがあるんですね! 心の支援なんて考えたことがありませんでした。来年



はクリスマスカードを作ってみました♪』と言ってくれた人がいて、とても嬉しく感じました。

原子力災害 (放射能) の影響は残念ながら長く続きます。原子力災害を被ってしまった地域や人の支援が必要なことや、チェル救の活動のことをもっと多くの人に知ってもらえたら良いなと感じました。できることを地道にしていこうと思います。(臨時会計係 大森)

事務局便り

8年目の3・11が巡ってくる。その折も折、思わぬ情報が飛びこんだ。福島を伝え、再生エネルギーを学ぶ「福島・ドイツ高校生交流プログラム報告会」を名古屋で開催できないものかと。大震災後、福島県を中心に被災地支援活動を行っている郡山市のNPO アースウォーカーズからである。2013年に始まった活動で、原発事故で被災した高校生たちが、ドイツを訪問し脱原発にシフトしたドイツの再生可能エネルギーの将来性を学び、ドイツの高校生達と平和、戦争、ヒロシマ・ナガサキなどについて語り合い、また、自らの「フクシマ」体験を語る旅を行った。その2018年版の報告会だ。是非彼らの話を聞きに来てほしい。(ちらし参照)(山盛)

「2019年 春の行事(測定隊&花見会他)」日程をお知らせします！！

春は毎年、測定隊と菜の花花見会があります。

そして今年はさらに、菜の花を生かした資源循環型の地域づくりを考える「第19回全国菜の花サミット in 那須野原(4月27～28日)」が、福島県の隣り、栃木県那須地域(大田原市・那須塩原市・那須町など)で開催されることが決まりました。

…ということで、日程を以下のように決定しました。

4月5日(金)～4月8日(月)…第34次測定隊

4月13日(土)…菜の花 花見会

4月19日(金)～4月22日(月)…第35次測定隊

4月27日(土)～28日(日)…菜の花サミット in 那須野原

芽吹きの春は、田んぼも畑も測定も…大忙し。(美)



＜昨年秋に蒔いた圃場を視察＞

編集後記

☆ある朝、自分の血尿にびっくり！しかし尿検査の結果は異常なし。納得できないまま自宅に戻り食事の支度で冷蔵庫をあけると、ビーツ3個入ったルビー色のスープが。犯人見つけ。(佳)

☆玄関前の下水管配備工事が終わり、暗かった玄関が明るくなった。気分を変えて寄せ植えを3鉢置いてみた。駅へ向う通り添いで囲いも無し、毎朝目視の確認作業が日課になった。(美)

☆12月某日、「ケアハウス」の設立を目指して奔走しているという、社会福祉法人(K)のH代表が再生協にやってきた。震災後H氏は、「地元(南相馬市)のご老人に、安らぎを取り戻していただく」…と考え、私財を投げ打って「終の住処(老人ホーム)」の建設を目指している…という。情報交換をする中で、「ええっ？」と一瞬耳を疑った「南相馬市の行政指導」の話の一つ紹介したい。市職員曰く、【施設(ケアハウス)の建設には協力するが、従業員には地元の人を採用しないで欲しい！(???)】…医療・介護の分野は今、慢性的な人手不足であるため、「市の復興計画の足を引っ張らないでほしい」…ということらしい。地元の復興・再生を目指す人々は、まず「行政という障壁」を乗り越えなければならない…という現実がある。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エーブリント」

TEL・FAX (052) 871-9473